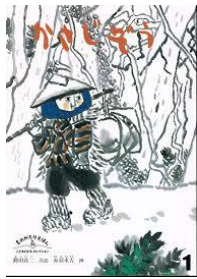


かさじぞう
 瀬田貞二／再話 赤羽末吉／画
 福音館書店（1966.11）

大みそかの日、おじいさんはあみがさを売りに出かけましたが、かさは売れず、持って帰ることになりました。途中、雪が積もった六体の寒そうなじぞうさまを気の毒に思い、売り物のかさをかぶせてあげました。しかし、かさが一つ足りません。おじいさんは、自分のかさを最後のじぞうさまにかぶせて帰りました。



次の日、「よういさ、よういさ、よういさな」と、おじいさんの家を探す声が聞こえ…。日本画のやわらかいタッチで見開きいっぱい描かれた扇型の挿絵はとても趣があり、ページをめくると昔話の世界に引き込まれていきます。寒い季節にぴったりな心温まるお話です。

かにおかし
 木下順二／文 清水崑／絵
 岩波書店（1976.12）

「さるかに合戦」という題名でも知られるこの昔話は、子ガニが親の仇討ちでサルをやっつけるお話です。



カニが丹精込めて育てた柿の実をサルがひとりじめにして、サルはカニに青い実を投げつけて殺してしまいます。つぶれたカニのこうらの下からはい出してきた子ガニたちが仇討ちに出かけますが、その途中で栗やハチ、石うすなどが加勢します。

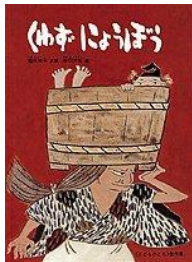
水墨画にほんのりと朱をほどこし、ページいっばいに描かれたユーモラスな絵が、独特の語り口と調和して味わい深い世界を創り出しています。

早く大きくなれと繰り返し柿の木をせっつくカニの様子や、子ガニたちが力を合わせてサルをこらしめるいきさつなど、子どもたちを引き付ける要素がたくさん詰まっています。

くわすにょうぼう
 稲田和子／再話 赤羽末吉／画
 福音館書店（1980.7）

文字どおり、飯を食わない女房のお話。

欲ばりな男のもとへ、飯も食わずによく働く美しい娘が嫁に来ます。しかし、その正体は…。



女房の実の姿がクモやへビ、鬼と語られているものもありますが、この絵本では恐ろしい「おにばば」として描かれます。

正体がばれ、娘からおにばばへだんだんと変化していく絵が見事。頭のとっぺんにある大きな口でにぎりめしを食べる様子や、男を追いかけて飛ぶように走る姿も迫力満点です。効果音に富んだ独特の言い回しもおにばばの怖さを際立たせます。

おにばばの苦手なものとして、ショウブやヨモギが出てくるため、端午の節句の時期に読んであげるのによい昔話ですが、夏、怖い話をせがまれたときにもぜひどうぞ。

さんまいのおふだ
 水沢謙一／再話 梶山俊夫／画
 福音館書店（1985.2）

ある日、山へ花を切りに行った寺の小僧は、どんどん奥へ進むうちに帰り道がわからなくなってしまいます。困った小僧は小さな家を見つけ、白髪頭のおばあさんに一晩泊めてもらうことにしましたが、夜中に目を覚ますと、そこには小僧を見おろして舌なめずりする鬼婆の姿が！



便所の神様からもらった三枚のお札のおかげで小僧はなんとか山寺にたどり着くのですが…

子どもは自分を小僧と重ね合わせて一緒に鬼婆から逃げまどい、おしまい和尚さんの知恵に感服してほっと安心できる小気味のよいお話です。

新潟の昔話をもとにしているため、方言が使われていますが、声に出して読むと何とも味わい深いものです。ページいっばいに広がる墨絵のような挿絵は、やわらかい線とぼかした色合いが昔話の語り口とよく合っています。

十二支のおはなし

内田麟太郎／文 山本孝／絵
岩崎書店（2002.11）

ずっと昔の年のくれ、神様は「あしたは、しんねんのごあいさつにきなさい。はやいものからじゅんに十二ばんまで、一年かんずつその年のたいしょうにしてあげよう」と言いました。



動物たちは大喜び。

ねこも大はしゃぎでしたが、ごあいさつに行く日を忘れてしまいました。「二日だよ」とすました顔でうそをつくねすみ。さて、その結末は…。

前日に出発するしっかりものうし、全速力で走るとらなど、動物たちの個性がユーモアたっぷりに描かれており、その躍動感あふれる絵がお話をさらに楽しくしています。お正月が近づくこの季節、よく尋ねられる人気の絵本です。

「十二支にはどんな動物が?」「順番の決め方は?」「なぜねこはねすみを追っかけるの?」など、いろんな疑問を解消してくれますよ。

だいくとおにろく

松居直／再話 赤羽末吉／画
福音館書店（1967.2）

東北地方の昔話が美しい絵本になり、1967年の出版以来、読み継がれている作品です。大きな川に橋をかけようとする大工とその川に住む鬼のお話。



大工が目玉をよこしたら鬼が代わりに橋をかけてやるという。大工が返事を渡るうちに立派な橋ができあがってしまい、目玉をよこせと鬼が迫る。逃げ出す大工に名前を当てれば許してやるという鬼。途方に暮れた大工だが、森の中で子守唄を耳にし、鬼の名前が分かる。

子どもは鬼やおばけなど怖いものが好きです。鬼とのかけひきや昔話ならではの満足する結末など、子どもをひきつける要素がたっぷり詰まっています。

歯切れのよい文章と遠目の効く絵は、人数の多い読み聞かせにも向いているでしょう。

だんだんのみ

長谷川摂子／文 福知伸夫／絵
岩波書店（2004.11）

ある日、ととさは急におなかが痛くなりました。お寺の和尚さんに相談してみると「そりゃ、はらのなかにむしがいるせいだ。ひとつかえるをのまっしゃい」と言われたので、カエルをつるっと飲みました。



カエルが虫を食べてくれたおかげで、おなかの痛みは治まりましたが、そのカエルがおなかの中で飛び回るので、今度はヘビを飲み込みました。

その後も、おなかがおかしくなるたびに和尚さんの教えに沿って、キジ、獺師、鬼を飲み込みました。そして、最後はその鬼を…。

それぞれの個性を版画によってシンプルかつユーモアたっぷりに表し、方言による文章と繰り返しが印象的な絵本です。最初は心配そうな、かかさですが、苦しむととさの後ろで見せるその表情も楽しいですよ。

天人女房

稲田和子／再話 太田大八／絵
童話館書店（2007.7）

若い牛飼いの男が、水浴びをしている天人の美しさに羽衣を隠してしまう。羽衣を隠された天人は天に戻れず、牛飼いと夫婦になり、子どもも生まれて幸せに暮らす。



ある日、子どもが歌う子守歌で羽衣のありがたがわかり、天人は羽衣をまもって子どもと共に天へ戻る。しかし、苦心して愛する家族のもとへ駆けつけた牛飼いに、天の父神はさまざまな試練を与える。

七夕祭りの由来といわれる「天人女房」は「羽衣伝説」や「七夕伝説」として国内で有名です。中国をはじめ、アジアやヨーロッパなど世界各国に類似した昔話があります。

星空が舞台になるスケールの大きなお話の中に、農耕、婚姻風習、民俗性が描きだされ、人間の生活は古代から現代までつながっているのだと感じさせてくれます。単純ながら、奥深い内容を色彩豊かな絵が引き立てています。

ふしぎなたいこ
石井桃子／文 清水崑／絵
岩波書店（1953.12）

げんごろうさんの持っているたいこはとってもふしぎ。たたくと鼻が伸びたり縮んだり。しかしそのたいこは、人を喜ばすためにしか使ってはいけないことになっていました。

ところがある日、げんごろうさんは、どこまで鼻が伸びるのか知りたくなりました。どんどんどんどんたいこを叩き続けるうち、鼻はみるみる天まで伸びていきました。

調子に乗り過ぎておしおきを受けてしまうげんごろうさんがほのほのとしていて、素朴な絵がやわらかくユーモラスな印象を与えてくれます。

慌ただしい日常の中で、ホッと一息つける絵本です。他に2編収録しています。

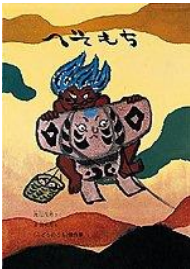


へそもち
渡辺茂男／作 赤羽末吉／絵
福音館書店（1980.7）

絵本が語る力を持つのは、言葉の世界と絵の世界がぴたりとひとつになったときです。「へそもち」は創作ながら、昔話の技法に基づいた完成度の高い物語。伝統的な墨絵や大和絵の手法を用い、この物語の世界を見事に表現した絵とともに、力強く語りかけます。

黒雲に乗って雨を降らせ、「おへそ」を取りにやってくるかみなりがダイナミックに描かれる一方、おしょうさんに懲らしめられる様子はとてもユーモラス。縦開きの展開が効果的に物語の世界を広げ、子どもたちをひきつけます。

幼いころ、「雷様におへそを取られる」とおどかされた記憶のある大人の方も多いはず。雷雨の季節、子どもたちと一緒に「おへそ」を隠しながら、楽しんでみてはいかがでしょうか。



へっぴりむすこ
ふじかおる／文 梶山俊夫／絵
童心社（2000.6）

「むかし、はまへの村にへっぴりしてはおどけてみせるむすこがおった」から始まる「屁（おなら）」を題材にした民話です。

屁ばかりする息子が「プップ ピップ ポーン」と屁をこくと鬼が現れ、息子と母親を山奥へ連れ去った。鬼が酔いつぶれるすきに逃げ出す親子。追いかける鬼の鼻面にへっぴり息子はびっぴりんと尻を突き出し、屁をこいた。

浜辺から山奥への冒険、屁、おもしろいかけ声、船、そして鬼、と子どもの好きなものが並ぶお話です。屁で鬼を退治して村へお土産を持ち帰るという気持ちのよい物語に、柔らかい線で描かれたおどけた絵がおかしみを深めます。対象は3歳くらいから、特に上限は決めず、テンポの良い軽妙な語り口と昔話ならではのナンセンス（屁のこきっぷり）を楽しんでください。



ももたろう
松居直／文 赤羽末吉／画
福音館書店（1965.2）

桃から生まれたももたろうは、おじいさんとおばあさんに愛情深く育てられます。やがて、きびだんごを持ち、犬、猿、キジをお供に従えて鬼退治に出かけます。

いろいろな説や結末がありますが、この絵本では、鬼の宝物を持ち帰るのではなく、さらわれた姫を連れて帰るといった結末になっています。

日本画のりりしいももたろうや語りよい言葉、擬音語の美しさなど、日本の昔話絵本の傑作の一つといえるでしょう。数あるももたろう絵本の中でもおすすめしたい1冊です。

